

# 関東以西の屈折像土偶

## —地域性への覚書—

### 磯 前 順 一

- 
- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 1. はじめに          | 4. 亀ヶ岡文化における宗教遺物の構造 |
| 2. 東北地方の屈折像土偶    | 5. おわりに             |
| 3. 関東以西における屈折像土偶 |                     |
- 

#### 論文要旨

亀ヶ岡文化は、主な規定要素である材質・身体性・文様表現の共有性と排他性を操ることによって、各形式相互の関連性を考慮しながら各宗教遺物の形式属性を決定していた。このことは、当時の社会が各宗教遺物をつらぬく統一的な意図をもっていたこと、さらにはそこに何らかの構造が存在していたであろうことを暗示している。そして、亀ヶ岡文化は東北地方全域に共通するような基本構造を前提としながらも、さらにその内部の各地域がそれぞれその基本構造の構成要素の改変をおこない、自地域特有の独自性をだそうとしていた。

それに対して、関東地方はその宗教遺物の構成が、亀ヶ岡文化との共通性を強くもちながらも東北地方内の各地域と間の差異とは同列に扱えない地域といえる。現在、6遺跡8点を数える関東地方以西の屈折像土偶は、後・晩期の立像土偶との関係において東北地方に類似した傾向を示すが、最終的な評価は関東地方あるいは近畿地方での文化構造のなかに占める位置によって論じられるべきだろう。

## 1. はじめに

縄文時代後期・晩期の東北地方を中心にみられる屈折像土偶は四肢を屈曲させた特異な形態で知られるが、現在のところ全国で総数51遺跡81点を数える。その内訳は、第1類が39遺跡49点、第2類が15遺跡32点である。1987年の拙稿『『屈折像土偶』について』(以下、旧稿と略す)で報告された32遺跡46例<sup>(1)</sup>に加えて、本稿では20遺跡35点が加算されており、特に第1類の資料の増加が著しい。また、関東地方以西の資料が6遺跡8点を数え、若干なりともその様相が窺えるようになった。

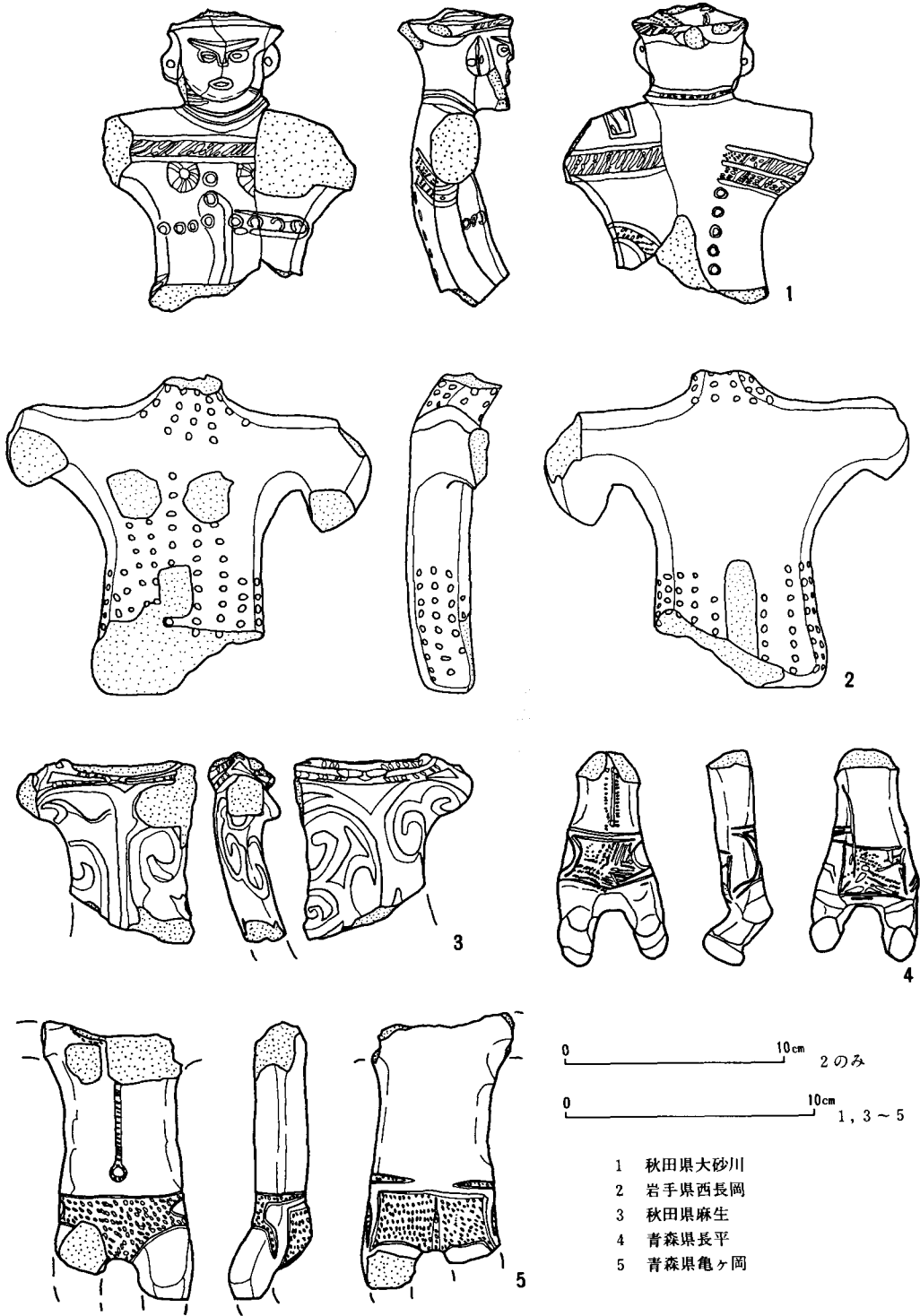
これらの増加資料をふまえ、本稿ではそれによって生じた旧稿に対する見解の修正を述べたい。そして、旧稿では扱わなかった関東以西における屈折像土偶の在り方について言及したい。また、屈折像土偶の在り方に加えて、亀ヶ岡文化を構成する宗教遺物の形式関連構造から、縄文時代における地域性の在り方を考えてみたい。

なお、本稿で紹介する東京大学総合研究資料館所蔵の資料8点(報告書で既発表の上高津の資料は除外する)については、正式な実測図の発表としてははじめてのものである(図1・3)。個々の資料の説明については省略したが、それについては、磯前順一・赤澤威『東京大学総合研究資料館所蔵縄文時代土偶・その他土製品カタログ』(1991)を参照されたい。

## 2. 東北地方の屈折像土偶

屈折像土偶第一類は後期前葉から晩期前葉にかけてみられ、腕を組み立膝をするものを基本形態とする。第二類は晩期中葉にみられ、腕を下垂させ足を軽く屈曲させた形態をとる。屈折像土偶の発生は後期前葉における北上川中流域を核とし、後期中葉から晩期中葉にかけて阿武隈川・馬淵川・岩木川・米代川・雄物川流域に分布を拡大してゆく<sup>(2)</sup>。さらに東北地方の内部においては、首部三角帯の有無、正中線の表現法、腕の組み方などから、馬淵川流域を交差点として日本海側の岩木川・米代川流域と太平洋側の北上川流域のあいだに地域差がみとれる。以上は旧稿の見解をほぼ同様に述べたものであるが、第1類のなかでも下肢を完全に屈曲しない一群については、旧稿の見解を訂正しなければならない。その時期については、関東地方で後期中葉のものが出土している点から、分布の中心地たる東北地方においても資料自体は未発見のもの、その上限が後期中葉までに遡る可能性が考えられる。また、宮城県貝島の資料(図2-5)から考えて、旧稿においてこの一群が各流域における屈折像土偶の初現形態にあたる点も誤りである。北上川流域では後期前葉から屈折像土偶が存在しており、後期末から晩期初頭にあたる貝島の資料を初現期のものとすることはできない。

このように不十分な下肢の屈曲をもつ第1類の一群を、屈折像土偶が各地域に伝播したさいの



- 1 秋田県大砂川
- 2 岩手県西長岡
- 3 秋田県麻生
- 4 青森県長平
- 5 青森県亀ヶ岡

図1 東北地方の屈折像土偶 (1) —東京大学総合研究資料館蔵品—



図2 東北地方の屈折像土偶 (2)

1. 宮城県入大 2. 秋田県八木 3. 福島県羽白C 4. 秋田県台A 5. 岩手県貝島 6. 岩手県屋敷  
7・9・10. 秋田県地方 8. 青森県風張

屈曲形態の理解の不十分さの現われとするのは困難であり、むしろそれは上肢形態のヴァリエーションと同様に、下肢の屈曲形態の多様さの現われと理解すべきである。その他、東北地方における屈折像土偶の詳しい在り方については旧稿を参照して頂くとして、次に関東以西の屈折像土偶をみてゆきたい。

### 3. 関東地方以西における屈折像土偶

関東以西の屈折像土偶(図3・4)は6遺跡8点を数えるが、現在のところ、それはすべて第1類に属する。それらは和歌山県瀬戸出土の1点を除くと、すべて関東地方出土のものである。<sup>(3)</sup> また、時期的にみると、後期中葉を上限とする後期の資料が関東地方から5点、晩期前半の資料

が関東と近畿から計3点出土している。但し、茨城県小場の資料(図4-3)は背面の文様からみて東北地方の土偶の範疇で理解した方がよいと考えられるため、本稿の考察からは除外する。

東北地方の屈折像土偶の在り方は、後期では立像土偶と同じ文様を有するため、独自の特徴は主としてその屈曲形態のみに求められた。それは関東後期の屈折像土偶にも共通する傾向であり、茨城県椎塚・福田・上高津(図3-1~3, 図4-2)の資料はいずれも頭部を欠くものの山形土偶の特徴を

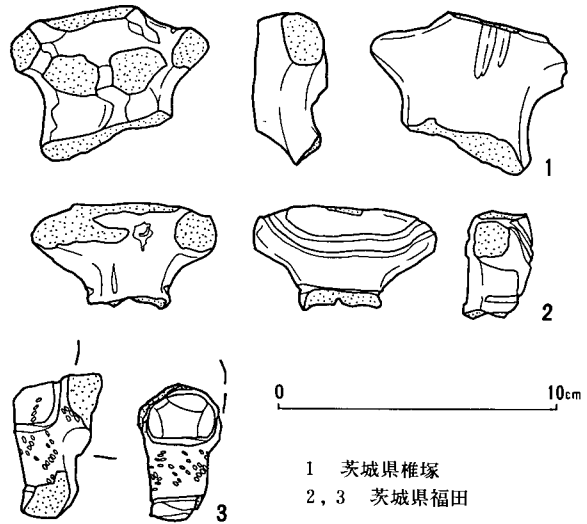


図3 関東以西の屈折像土偶 (1)  
—東京大学総合研究資料館蔵品—

示している。これらの点から関東地方後期における屈折像土偶は、山形土偶内部の一型式として存在していたと考えられる。山形土偶は同時期に複数型式を含んでいた可能性が高く、屈折像土偶もその一型式を構成していたとしても不思議ではない。但し、関東地方後期の山形土偶と東北地方南部の同時期の土偶は類縁性を有するため、明確な断言は完形資料の出土を待たなければならない。

これらの資料のうち福田と上高津の資料(図3-3, 図4-2)は膝を直角に屈曲するものであり、完全な屈曲を示さない類に属する。埼玉・栃木・茨城県などの北関東および東関東周辺部には、下肢の屈曲は伴わないものの粘土瘤によって膝頭を表現する山形土偶がみられ(瓦吹1990)、今後、両型式の関連が注目される。

さて、東北晩期の屈折像土偶は、後期のような形態上の相違だけでなく、文様表現の点でも立像土偶と区別される。但し、文様特徴の点において屈折像土偶と立像土偶は完全な排他的関係にあるのではない。その点で旧稿の見解は次のように訂正される。現在のところ、最も多くの型式に分化しているのは立像土偶であり、屈折像土偶は立像土偶と全く異なる型式内容をもつのではなく、立像土偶の一部の型式を共有する。具体的に言えば、屈折像土偶が立像土偶と共有する型式の主なもの、中実a形土偶と省略形土偶であり、その共通特徴は写実的表現に求められる。その一方で、抽象化的表現をとる遮光器形土偶は共有型式にはみられない(磯前1991a)。

このような東北地方の在り方と同様に、関東・近畿地方の晩期屈折像土偶も写実的特徴を有し、遮光器形土偶とは区別される。そして、同一個体の左右両下肢と思われる東京都なすな原の資料は(図4-4・5)、遮光器形土偶のみならず、文様・形態において在地のみみずく土偶とも区別される(磯前1988a・鈴木1989)。また、この両手を各々の膝の上におくかたちは、東北地方の上肢三形態とも区別される。一方、瀬戸の資料(図4-1)は左右の上肢を横位に交差させる点

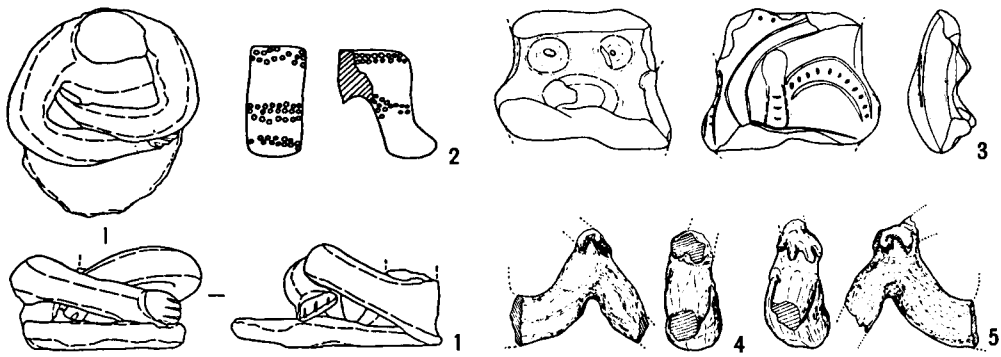


図4 関東以西の屈折像土偶 (2)

1. 和歌山県瀬戸 2. 茨城県上高津 3. 茨城県小場 4・5. 東京都なすな原

で、東北地方のものと共通するが、下肢の表現を省略する点では東北のものとも在地の立像土偶とも異なる。

関東以西の晩期の立像土偶型式が十分に明らかではない上に、なすな原・瀬戸の両資料とも完形ではないため、この2点の資料が後期のように在地土偶の特徴を備えたものの屈折像化なのか、亀ヶ岡系の中実形土偶の屈折像化なのかは現在のところ判断できない。目下、確認できるのは、晩期の屈折像土偶は関東以西においても写実性の点で遮光器形土偶と区別され、その点では東北地方の区分が継承されていることである。そしてその一方で、上肢や下肢などに東北地方にはみられない形態をもっている。この形態の特異性が関東以西の各地域で型的な一般性として確立されたものなのか、あるいは伝播のなかでの個体差に過ぎないものなのかは、出土数の少なさ・遺存状態の悪さという資料的制約のために判断することができない。しかしいずれにせよ、形態の上で東北地方と同じものでありえなかったことは、関東以西の地域がそれぞれ固有の文化構造を有していた可能性を示すものである。

#### 4. 亀ヶ岡文化における宗教遺物の構造

以上、屈折像土偶における地域性の在り方に言及してきたが、資料的制約の強い屈折像土偶のみからでは、各地域の文化のもつ構造的な在り方を窺うことはできない。ここでは亀ヶ岡文化を例にとり、地域性の問題を考えてみたい。亀ヶ岡文化のもつ地域性の問題は、稲野裕介・稲野彰子・藤村東男らによって遺物の分布域の組み合わせの研究として進められてきた。本稿でもこれらの先行研究をふまえて、地域性の問題を考えることになる。但し、現在の難点は重ね合わされた分布域から何を読みとるかという点にあり、本稿ではそれを形式・型式の属性の比較・関連から文化のもつ構造の問題として解釈してゆきたい。なお、この方法は、筆者が土偶型式の間および土偶と仮面の関係について論じたものでもあり(磯前1987a・1991)、ここでは代表的な宗教遺物と呼ばれるものの各形式間の関係性からそれらの遺物全体をつらぬく構造の問題に触れてみ

たい。

まず、亀ヶ岡文化における主要な宗教遺物の定義をしておきたい。亀ヶ岡文化の宗教遺物の種類は多いと考えられるが、実際にその形式特徴が把握されているものはあまりない。ここではその特徴が比較的わかっている土製仮面、土偶、岩偶（稲野裕1983、江坂1960）、岩版、土版<sup>(5)</sup>、石棒（野村1983、後藤1986・1987）<sup>(6)</sup>などを、亀ヶ岡文化の宗教遺物の代表的なものとしてとりあげたい。下記の表に示されるように、これら各形式の遺物はまず、その形態および材質によって区別される。

形態においてこれらの宗教遺物は、土製仮面・土偶・岩偶・石棒のように人間と共通する身体表現をもつもの<sup>(7)</sup>、岩版・土版のように基本的に人間の身体表現をもたないものに二分される。

表1 亀ヶ岡文化の宗教遺物の形式特徴

	身 体 表 現			非 身 体 板 状
	顔	全身像	生殖器	
土製品	土 面	土 偶		土 版
石製品		岩 偶	石 棒	岩 版

そのうち身体表現をもつものについて

は、さらに土製仮面のように顔部のみのもの、土偶・岩偶のように顔を含む全身像をもつもの、石棒のように生殖器のみのものに三区別される。なお、岩版・土版のなかに顔部表現を有したのもみられるが、あくまでもその基本特性は身体表現を伴わない文様表現にあり、顔部表現をもったものはそのヴァリエーションの一形態として理解すべきであろう（小林1967）。

ちなみに、生殖器だけの表現は一般には男根の場合のみにみられる。それに対して、女性生殖器がそれのみで単独に表現されることは少なく、顔部も含めた全身像すなわち土偶のなかで表現されることが普通である。逆に、土偶のなかに男性的な身体特徴を積極的に見出せることは少なく、亀ヶ岡文化では全身像は女性性と、生殖器のみは男性性と結びつく傾向にあったことがわかる。このことは、彼等が全身像と生殖器のみの表現を区別していただけでなく、その各々を異なる性質のもとに理解していたこと、すなわち当時の社会における男性性と女性性に対する認識の違いを示している（磯前1988b）。

身体区分に加えて、材質の上で亀ヶ岡文化の宗教遺物は土製品と石製品に分けられる。土製・石製品はある特定形態に対して、土と石の両材質がみられる場合と、一方の材質しかみられない場合がある。前者の例としては非身体形態をもつ岩版と土版、および全身像をもつ岩偶と土偶。後者の例のうち、石製品としては生殖器のみの石棒、土製品としては顔部のみの土製仮面が指摘される。なお、同じ石製品といっても、石棒は片岩・粘板岩などの灰色・緑色で硬質の石材で（野村1978）、岩版は水成岩などの白色で軟質の石材で作られることが多く（江坂1960）、形式によって異なった石材が選択されている。

このように、各形式における材質の選択は意図的なものであり、その選択のさいの主要因としては、各形式のもつ形態・文様の表現しやすさ、例えば石棒であればその硬質性・研磨法、土偶であれば身体表現や複雑な文様施文のための可塑性などが考えられる。しかし、石材のもつ色調

への指向性などから、そのような物理面での要請以外に、観念上での選択要因もあったと考えられる。

そして、これら形態・材質の相違によって規定される各形式には、その性質に適した文様表現が選択され施文される。周知のように同時期におけるすべての形式の遺物に同一の文様を用いられることはなく、実際には特定の形式間では同じ文様が共有され、別の形式間では異なる文様を用いられるという現象がみられる。例えば、石製品と土製品が同じ形態をもつ場合、両者の関係は岩版と土版のように基本的に同じ文様表現を有するものと、土偶と岩偶のように異なる文様表現を有するものに分かれる。また、土偶や岩版・土版のようにひとつの形式のなかの複数型式の間でも施文文様が異なるものもある。例えば、関東地方の場合であるが、土版・岩版は土器型式と共通性をもつものと、石棒・土偶と共通するものとに分化している(鷹野1977・稲野彰1982)。また、立像土偶も、屈折像土偶と文様を共有するものと、遮光器型土面と文様を共有するものに分かれる(磯前1987a・1991)。このように、文様表現においても各形式・型式の間で共通性と排他性の作用が働いていることがわかる。

以上みてきたように、各形式の遺物は互いに無関係に孤立したままに作られたのではなく、相互に関連性をもったうえでその形式属性を規定されていたことが窺える。このことは、当時の社会が各宗教遺物をつらぬく統一的な意図をもっていただことを示しており、それはまたそこに何らかの構造が存在していたであろうことを示している。そして、それは材質・身体性・文様表現の三要素を主な座標軸として構築されており、その共有性と排他性を操ることによって、各形式遺物の特徴を決定していたと思われる。細かく言えば、材質は土製品と石製品に、身体性は顔・全身像・生殖器にそれぞれ区分され、それらの要素の選択と組み合わせの上で各形式の特徴が決定される。さらにそれに対して、複数存在する文様表現から特定の文様表現が選択され、各形式に施文される。このような宗教遺物をつらぬく構造の存在は、目的に応じて各遺物が作られていたことを窺わせ、当時の観念の複雑さを意味している。それは、仮面と土偶(磯前1991)、岩版・土版と土偶(稲野彰1990)、土器と土偶(磯前1987b)などの間に指摘されている廃棄・埋納の違いとも対応するものであり、形式間の相違とはそれらの遺物を用いた儀礼の目的・内容自体の違いを伴うものである。

そして、このような構造は亀ヶ岡文化全体として共通性を有するものの、細かい点では亀ヶ岡文化内の各地域ごとに異なっている。ここでは相違点を示す例として、亀ヶ岡文化の代表的地域である北上川中・馬淵川・米代川流域の三地域をとりあげてみたい。これらの地域のなかでも、馬淵川流域はとくに他地域にあまりみられない自地域特有の形式・型式の遺物をもつ。その代表的なものとして鼻曲り型土面や岩偶、その他に宗教遺物とは考えにくい内面渦状土製・石製品をあげることができる。それに対して、北上川中・米代川流域には他地域に存在しない目立った形式・型式の遺物はほとんどみられない。

その一方で、これら三地域に共有するものとしては、遮光器型土面、岩版・土版、石棒、屈折



像土偶をはじめとする諸型式の土偶がある。しかし、これらの他地域と共有する形式・型式も、その内部で各地域独自の地域差をもつものに分けられる。例えば、岩版・土版はその発生地である馬淵川流域では両方の材質のものがみられるが、北上川中流域では土版のみ、米代川流域では岩版のみがみられる（稲野彰1983）。そこには各地域の材質に対する選択性がみてとれる。同様の材質に対する選択は内面渦状土製・石製品、岩偶にもみられる。馬淵川流域では内面渦状製品が土製・石製品の両材質にわたってみられるが、米代川流域では土製品のみみられる。そして、北上川中流域では内面渦状土製・石製品そのものの受容が拒否されている（稲野祐1982）。同様に馬淵川のみにもみられる岩偶も、周辺地域に伝播すると、岩偶形土製品に改変される（稲野祐1981・1983・1990）。

また文様面でも、馬淵川流域では内面渦状土製・石製品が右巻きの文様であったが、米代川流域では左巻きの文様に改変されている。このような特定形式・型式に施される文様の改変は、他の資料の場合にもみることができる。例えば馬淵川流域では岩版と結び付いていたS字状入組文が、岩木川では石剣と結び付き、北上川中流域では逆S字状入組文に改変されて石剣と結び付く（稲野祐1985）。

従来、これら遺物にみられる地域差は、各遺物の分布の中心地から離れた辺境に生じた形式・型式内容の規制弛緩の産物であると考えられてきた。しかし、これらが本当に形式・型式内容の規制弛緩の産物ならば、各「形式・型式」としての地域差というかたちで普遍性がみてとれるような規律性をもってではなく、もっと秩序のない個体差の大きいかたちで現われるはずである。むしろ、明確に地域差というかたちでその地域特有の形式・型式特徴がみられるということは、その地域特有の遺物に対する規制力、つまり他地域とは異なるその地域特有の形式・型式理解が存在していたことを示している。稲野祐介は形式・型式によって分布の広さに違いがあることを指摘しているが（稲野祐1987）、この分布の違いも各地域ごとの形式・型式受容の選択によって生じたものと理解されよう。

これらのことから、各形式・型式の受容そのものの選択、材質の選択、文査の選択という働きを用いて、各地域が亀ヶ岡文化の宗教遺物を自地域に適するように改変し、その遺物組成を作り上げていたことが窺える。このことは亀ヶ岡文化を構成する各地域にも主体性、つまり独自の構造があった可能性を示している。但し、その構造は各地域ごとに全形式・型式を通した特定材質・文様への嗜好性がみられるとか、全形式・型式を通して把握できるような一例えばA地域はB地域よりもC地域と親密性をもつというような単純な斉一性で括れるものではない。ここでは各形式・型式に応じた諸地域とつながり、各地域によって異なる形式・型式の選択が存在する。以上、ここには東北地方の亀ヶ岡文化全域に共通するような基本構造と、それを前提とした基本構造のなかでの各地域での構成要素の改変が指摘される。構成要素を改変することによって、各地域は他地域に対する独自性を打ち出したと思われる。これが西日本にゆくと、基本構造自体が変わり一勿論、縄文時代全体としては共通構造を有するが、屈折像土偶をはじめとする亀ヶ

岡文化の構成要素はその異なる構造のなかに改めて組み込まれるのである。そして、関東地方はその宗教遺物の構成が西日本ほど亀ヶ岡文化と異なるものではないが、各形式内での形態と文様の特徴すなわち型式が、東北地方のものとは明らかに異なっており、亀ヶ岡文化との共通性を強くもちながらも東北地方内の各地域と間の差異とは同列に扱えない地域といえよう。

## 5. おわりに

以上みてきたように、亀ヶ岡文化の各地域のあいだの関係はまったく異なるというものではなく、亀ヶ岡文化全体としての構造の共通性を前提とした差異性、つまりそのなかの構成要素を異ならせたもの一文様の交換や材質の転換、さらには特定形式の受容の拒否など一として理解されよう。このような観点をもつことによって、従来漠然と考えられていた地域性というものを、形式の関連としての構造を同じくする意味での地域と、その構造を共通の前提としながらもその下位単位としてそのなかの構成要素を異ならせる意味での地域との、二つの異なる次元の地域の重層的な関連の総体として理解することが可能となろう。今回は亀ヶ岡文化の、特に代表的な宗教遺物に限定して大まかな見通しを述べたが、この観点は文化全体の構造に拡大して論じられてゆくべきであろう。

かつて型式学研究の不毛が叫ばれ、その研究の是非について論じられたことがあるが、やはり型式学研究は無限に続けられるべきである。しかし、それは同時に型式に対する解釈行為を伴わなければならない。日本考古学における型式学研究の昏迷は、型式の細分化自体にあるのではなく、解釈の欠如すなわち研究目的と方法の欠如にある。その意味で、今後とも、遺物の分布を明らかにしてゆくことは一層必要とされるが、同時に各型式・型式の属性の連関から文化構造の在り方をも考えてゆかなければならない。このような視点をもつことによって、縄文社会における宗教研究は従来のような宗教遺物の羅列的記述の域を越えて、考古学的方法である型式学研究を前提としながら、当時の社会の観念の在り方により即したかたちで近づき得ると考えられる。

本稿の「2. 東北地方の屈折像土偶」「3. 関東地方以西における屈折像土偶」は、1988年1月30日に国立歴史民俗博物館でおこなわれた「土偶とその情報」研究会での口頭発表「屈折像土偶について」(磯前1988a)の内容をもとにしたものである。なお、本稿を発表するにあたって、東京大学総合研究資料館の資料の発表を快諾して下さった赤澤威先生、ならびに「土偶とその情報」研究会での発表の機会を与えて下さった小林達雄氏、そして八重樫純樹氏に深い感謝の意を捧げたい。

### 註

- (1) 旧稿で屈折像土偶第1類の数を19遺跡20点と記したが、それは21遺跡26点の誤りである。したがって、旧稿の時点での第1類と第2類の総数は32遺跡46点となる。
- (2) 第1類と第2類の時期的区分の境界は大洞C1期にあるが、それが典型的にみてどちらの類に属するかを最終的に決定するのは未だ困難である。
- (3) 瀬戸遺跡の資料は、谷口康浩氏の御教示による。

- (4) 本稿では、型式学に基づいて導き出された遺物の分布域を文化領域としての地域性を示すものとして理解したが、その一方で集落論に立脚した社会集団研究と遺物の分布域との関係の解明が今後待たれる。
- (5) 岩版・土版の代表的研究としては、天羽利夫のもの(1965)、鷹野光行のもの(1977)、稲野彰子のもの(1982・1983・1990)をあげることができる。
- (6) ここでは石棒を石剣・石刀を含む総称の意味で用いる。
- (7) 当然のことではあるが、われわれは神を表現するさいに人間の姿に似せて作るのである(磯前1988b)。

#### 参考文献

- 天羽利夫 1965 「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」『史学』37-4
- 磯前順一 1987 a 「『屈折像土偶』について」『考古学雑誌』72-3
- 同 上 1987 b 「土偶の用法について」『考古学研究』34-1
- 同 上 1988 a 「屈折像土偶について」(レジュメ)「土偶とその情報」研究会
- 同 上 1988 b 「心的象徴としての土偶」林道義編『ユング心理学の応用』みすず書房
- 同 上 1991 「縄文時代の仮面」『考古学雑誌』76-1
- 磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』東京大学総合研究資料館
- 稲野彰子 1982 「関東地方における岩版・土版の文様」『史学』52-2
- 同 上 1983 「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣
- 同 上 1990 「土偶と岩版・土版」『季刊考古学』30
- 稲野裕介 1979 「亀ヶ岡文化における石剣類の研究—文様に基づく分類—」『北奥古代文化』11
- 同 上 1982 「亀ヶ岡文化における内面渦巻状土(石)製品とその分布」『史学』52-2
- 同 上 1983 「岩偶」前掲『縄文文化の研究 9』
- 同 上 1985 「亀ヶ岡文化におけるS字状入組文の分布」『日高見国』1985
- 同 上 1987 「呪物」『季刊考古学』21
- 同 上 1990 「土偶と岩偶」『季刊考古学』30
- 江坂輝彌 1960 『土偶』校倉書房
- 瓦吹 堅 1990 「山形土偶」『季刊考古学』30
- 後藤信祐 1986・1987 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(上・下)」『考古学研究』33-3・4
- 小林達雄 1967 「縄文晩期における<土版・岩版>研究の前提」『物質文化』10
- 鈴木正博 1989 「安行式土偶研究の基礎」『古代』87
- 鷹野光行 1977 「関東地方の土版の分類について」『古代文化』29-10
- 野村 崇 1978 「北部日本における縄文晩期の石刀について」『北海道開拓記念館研究年報』6  
(同『北海道 縄文時代終末期の研究』みやま書房 1985)
- 同 上 1983 「石剣・石刀」『縄文文化の研究 9』
- 同 上 1984 「北海道の亀ヶ岡文化」『北海道文化』1
- 藤村東男 1983 「岩手県九年橋遺跡出土土偶の損壊について」『萌木』18
- 同 上 1991 「縄文時代晩期における東北地方の地域性」『考古学研究』38-2

#### 屈折像土偶追加文献

##### <北上川流域>

1. 岩手県西磐井郡花泉町貝鳥貝塚  
花泉町教育委員会 1971 『貝鳥貝塚』第37図-29
2. 岩手県紫波郡紫波町西長岡遺跡  
磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』UMUT598
3. 岩手県稗貫郡大迫町大迫・屋敷遺跡

大迫町教育委員会 1989 『屋敷遺跡』第30図-1

<馬淵川流域>

4. 青森県八戸市大字是川字伏森・風張遺跡

藤田亮一 1990 「青森県八戸市風張(1)遺跡出土の合掌土偶」『考古学雑誌』76-2 第7図

青森県八戸市教育委員会 1991 『風張(1)遺跡I』第52図

5. 岩手県二戸市金田一字舌崎・雨滝遺跡

相馬生奈子 1989 「岩手県雨滝遺跡出土の土偶」『明治大学考古学博物館館報』4 第58図-44 (但し説明文はp. 59-42)

<岩木川流域>

6. 青森県西津軽郡木造町大字亀ヶ岡遺跡

磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』UMUT553-2

7. 青森県西津軽郡鮭ヶ沢町長平遺跡

磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』UMUT554

甲野 勇 1928 「日本石器時代土偶概説」杉山寿栄男編『日本原始工芸概説』(甲野 勇『日本考古学選集 第20巻』築地書館 第161図-3~11)

<米代川流域>

8. 秋田県山本郡二ツ井町大字七座字麻生遺跡

磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』UMUT297

<雄物川流域>

9. 秋田県平鹿郡増田町増田字仁井田堰向・八木遺跡

秋田県教育委員会 1989 『八木遺跡発掘調査報告書』第50図-11・13・14

10. 秋田県由利郡象潟町大砂川遺跡

磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』UMUT302

大野雲外 1917 「東北紀行」『人類学雑誌』32-3

甲野 勇編 1964 『日本原始美術 2 土偶・装身具』講談社

11. 秋田県秋田市地方遺跡

秋田市教育委員会 1987 『地方遺跡』第171図-111・113, 第172図-123・124・126, 第173図-143・144, 第175図-185・186・188

12. 秋田県秋田市上北手古野・台A遺跡

秋田市教育委員会 1986 「台A遺跡」『地藏田B遺跡・台A遺跡・湯ノ沢I遺跡・湯ノ沢F遺跡』第24図-2

<阿武隈川流域>

13. 宮城県伊具郡丸森町耕野字入大遺跡

丸森町教育委員会 1989 『入大遺跡』第49図-1・2

14. 福島県須賀川市小倉字一斗内遺跡

福島県教育委員会 1984 『一斗内遺跡』第178図-24

15. 福島県相馬郡新地町大字駒ヶ嶺字田丁場・三貫地貝塚

玉川一郎 1980 「(抱っこちゃん)土偶」『文化福島』2月号

16. 福島県相馬郡飯館村大倉字羽白C遺跡  
福島県教育委員会 1988 『羽白C遺跡(第1次)』図290-9  
<関東以西>
17. 茨城県高萩市上手綱字小場遺跡  
茨城県教育財団 1986 『小場遺跡』第215図-26
18. 茨城県土浦市上高津貝塚  
Takeru Akazawa 1972 『Report of the Kamitakatsu Shell-midden Site, The University Museum, The University of Tokyo』figure14-2  
磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』  
UMUT K114
19. 茨城県稲敷郡江戸崎町椎塚中の峯・椎塚  
磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』  
UMUT189
20. 茨城県稲敷郡東村福田貝塚  
磯前順一・赤澤 威 1991 『東京大学総合研究資料館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ』  
UMUT86・177
21. 東京町田市成瀬・なすな原遺跡  
なすな原遺跡調査会 1984 『なすな原遺跡』562頁-31・32
22. 和歌山県西牟婁郡白浜町白浜・瀬戸遺跡  
和歌山県教育委員会 1983 『和歌山県史』第241図-2  
細川美千子・泉 拓良 1987 「西日本の土偶」(レジュメ)「土偶とその情報」研究会

(東京大学文学部)

Clay Figurines in Bending Posture  
to the West of the Kantô District  
— Notes on their local features —

ISOMAE Jun'ichi

The religious relics of the Kamegaoka Culture were identified as to type and attributes by manipulating the commonness and exclusivity of the materials, physical characteristics, and expression of patterns, which are the main deciding factors of a culture, and considering the relationship between the various styles. This suggests that the society, at that time, had a unified intention which ran through the various religious relics, and that there might have existed some kind of structure. In the Kamegaoka Culture, with its basic structure common to the whole Tôhoku District, each sub-area therein attempted to reform the components of its basic structure, and to show an originality unique to that sub-area.

On the other hand, though the structure of religious relics in the Kantô District had a lot in common with the Kamegaka Culture, the difference between it and the Tôhoku District was larger than the differences among the various sub-areas of the Tôhoku District. So far, eight clay figurines in bending posture have been excavated from six sites to the west of the Kantô District. These clay figurines show a trend similar to those of the Tôhoku District in the later and final period, but the final assessment should perhaps be discussed based on their position in the cultural structure of the Kantô or Kinki Districts.